

はなしのたね

加藤真祐子

デザイン工芸コース

江戸期の遊び心ある造形の弁当箱を見たことをきっかけに、周囲との会話の材料になるような器の制作を決めました。落花生の弁当箱、桃の種の菓子器、クルミの小鉢はそれぞれ異なる植物の種をモチーフにしています。食事やお茶の時間をより楽しいものにする話のタネになれば幸いです。



漆工芸／乾漆技法・漆・麻布／h180×w95×d180mm／h180×w200×d290mm／h120×w100×d115mm

まとう

布の襞を用いた乾漆造形の応用研究

渡辺秀晴

芸術文化科学研究科

布の柔らかく自由に形を変える様子に興味を持ち、自身の制作に取り入れました。

布が見せる様々な表情の中でも特に面白いと感じる瞬間をとらえたいと思い、服飾分野における「ドレープ」「ギャザー」「プリーツ」の3つの襞の様子を作品で扱いました。



漆造形／乾漆・布・漆／h1700×w1200×d320mm

うるみわ

漆・麻布・錫粉・和紙・炭粉・脱乾漆
 h50×w60×d60mm(×10)
 h15×w30×d30mm(×10)

小淵 史織

デザイン工芸コース

漆には様々な魅力がある。肌になじむように滑らかな触感はその内の一つだ。私自身、漆塗りのお椀を初めて使った時にその口当たりに感動した。しかし、時代が移り生活様式が変化すると共に、人々にとって漆は身近なものではなくなり、その価値が理解されなくなっている。漆を知らない人にも興味を持ってもらい、その魅力に気付くきっかけを作りたい。

そこで、漆の「触感」をテーマに現代生活における漆の在り方を考えた。日々の生活で使うものとして、アクセサリーに着目し、漆の不思議で魅力的な触感を楽しむため、体の中でも感覚の鋭い手で触れやすい位置に身につけるバングルと指輪を制作した。色漆を使い、内側の肌に触れる面は塗立て、外側は様々な質感に仕上げた。身につけることで、漆の持つ多様な触感を楽しむことができる。



Wakasugi, Ayako 'Flower' pouring bowls and cups

花咲心

漆・和紙・麻布・脱乾漆

φ120×h70mm, φ75×h55mm

h70×w170×d160mm, φ75×h50mm

h60×w140×d120mm, φ80×h50mm

φ110×h70mm, φ70×h50mm

若杉 綾子

デザイン工芸コース

漆は、美しさと実用性を兼ね備えた素材だと思います。その特徴を生かして、日常生活の中で親しみをもって使うことのできるものに取り込みたいと考えました。

そこで、私は衣・食・住の「食」の場面に着目し、「家族や親しい友人と一緒にお酒を飲むことを楽しむ時間」という日常生活の一場面を想定し、そのような場にあつたらしいと思う酒器を制作しました。

季節ごとに咲く花の中から、春はチューリップ、夏は芙蓉、秋は菊、冬は水仙を選び、モチーフとしました。また、器の造形から花らしさを感じられる様にしました。

この器を使う人にお酒と共に四季の移ろいも楽しんでもらいたいと思います。



Bon appetit !

漆・麻布・発泡スチロール・合板・漆造形
h100×w350×d350mm (×2)
h20×w180×d180mm (×6)

中西 愛美

デザイン工芸コース

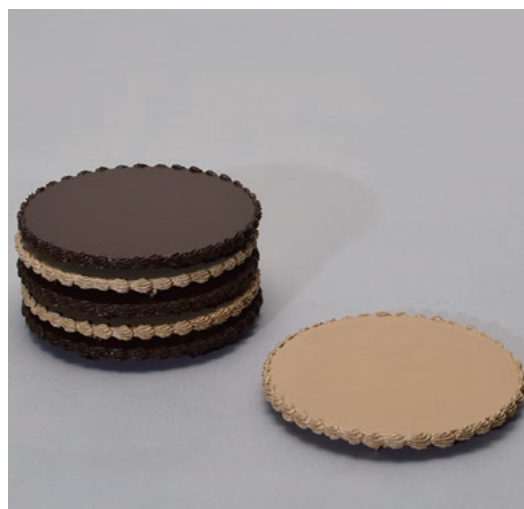
まるでケーキのようなケーキスタンドとプレート。ケーキがのっていないでもそこにケーキがあると想像できるような、そんな食器を作りたいと思い制作しました。

ケーキらしさを表現するにあたり、漆の塗り技法である「とんとん錆」を用いホイップクリームを表現しました。実際にお菓子づくりで使用される口金を使用しとんとん錆を絞り出しました。

ケーキを食べる時、美味しさで幸せな気持ちになるとと思います。食器を見ただけで、どんなケーキをのせようかわくわくと幸せな気持ちになってもらいたく、仕上げは色漆やLG粉を使いカラフルに仕上げました。

日本でケーキスタンドはなかなか馴染みのないものだと思います。しかしケーキスタンドにケーキをのせるだけでテーブルの上はとても華やかになります。

このケーキスタンドとプレートで準備の時から、どんなケーキをのせようかとわくわく想像し、ケーキを食べる時間を楽しんでもらえればと思います。



紙胎椰子蟹立像 阿吡

— 紙を用いた漆造形の研究・制作 —

漆・ケント紙・和紙・紙パルプ・立体造形・紙胎
h500×w1700×d1000mm
h500×w1700×d950mm

小泉 巧

芸術文化科学研究科

Geibun Prize 2018 受賞

紙と漆を用いて制作した作品。“平面の紙を一度折ることで立体になる”ということから紙に興味を持ち、この研究を始めた。紙を切る、折る、巻くといったような加工を紙に施し、漆と組み合わせることで面白い表現ができるのではないかと模索し、実践している。今回の制作では、紙と漆による工芸品である立烏帽子の製造技法を用いた。立烏帽子は和紙に錐でしわを寄せ、その和紙を立烏帽子の形に成形して作られている。立烏帽子の工房へ取材をし、未熟ながらも技術を習得して、表現技法として取り入れた。

この作品では陸上で生きる節足動物の中で最大のヤシガニをモチーフとして選んだ。自分が対峙した時に、憧れ、己の無力さ、モチーフに対する恐れなどといった、強いコンプレックスを感じた生き物をモチーフとしている。



Kakamu, Haruna *norari kurari*

のらり くらり

立体造形・漆・麻布・発泡スチロール
和紙・炭粉・乾漆技法
h400×w620×d420mm
h180×w175×d130mm
h120×w140×d115mm
h120×w140×d115mm

各務 春菜

芸術文化科学研究科

この作品は、コビトカバをモチーフとした乾漆像である。持つ、抱く、撫でる等、様々な触れ方で鑑賞してもらいたいと思い、大きさや触れたいくなる形を考え、造形をした。そして、触れてもらうことを目的としているため、それぞれの表面は、和紙を貼ったり、炭粉を蒔いたり、磨き上げツヤをだしたりと、触感の違う表現を行った。

現在、作品と呼ばれる漆のほとんどは、眺めて鑑賞するが、実際に作品に触れ、手触りや重さや漆の匂い等を感じてもらい、より理解してもらおうことが、漆に興味を持ってもらうきっかけになると考え、触れて鑑賞する作品を制作した。



Sugimoto, Mai *naturally***naturally**

漆・和紙・ピアノ線・樹脂粘土・金粉・銀粉・金箔・青貝
 h80×w120×d100mm
 h50×w90×d100mm
 h60×w50×d110mm
 h30×w170×d90mm
 h20×w60×d80mm
 h25×w30×d90mm
 h25×w25×d25mm

杉本 真唯

芸術文化学研究科

漆と和紙を用いて、植物をモチーフとした装身具を制作しました。日本の自然の中で目にする植物をモチーフとすることで、忙しい生活や、漠然とした不安を抱える現代の日本人の心に寄り添うような装身具を目指しました。植物には、心に寄り添い、癒す力があり、また、植物由来の自然素材である漆と和紙には、植物の力が宿っていると感じます。

歴史の中で、植物など自然物を用いた装身は、古くから存在し、現在でも様々な地域で行われています。植物を用いた装身具には、自然への憧れや敬意、また植物の持つ力を身に宿そうとする物、自然の一部になろうとする物など、植物から力を得ようと身につけられている物が多くあります。

記憶の中の幼い頃に親しんだ自然や、日々の生活の中で近くにあった植物を身につけることは、心の癒しに繋がるのではないのでしょうか。このような植物の持つ力は、自然と離れて暮らす現代の日本人にとって必要な物であると思います。



ときめき

革・革製ハイヒール・漆・青貝・金粉・金箔
h130×w200×d70mm
h180×w100×d270mm

野路 朋生

芸術文化学研究科

革に漆加飾を施したバッグとハイヒールを制作しました。漆と革は、古くから印伝や漆皮など、一緒に使われてきた素材です。バッグ胴体、ハイヒールのプラットフォームにしている加飾は、松皮印伝という加飾技法を参考に、ひび割れた模様を表しました。また、革の動きに対応出来る漆加飾として、あわび貝の薄板で貝特有の光を表す青貝細工や、金箔で文様を表す箔絵技法を施すことにしました。優美な革の質感と漆加飾の華麗な表現の融合を目指し、新たな漆と革の関りを提案した作品です。



Bison

一紙を用いた漆造形の研究・制作一

漆・ケント紙・画用紙・和紙・紙紐・紙パルプ
h2000×w3200×d1200mm

小泉 巧

Koizumi, Takumi

デザイン工芸コース

紙と漆による造形作品。

“ 紙は折ることで平面から立体になる ”

この誰もが知っている事象に注目し、漆と紙を組み合わせることで様々な表現ができるのではないかとこの研究。紙を折る、切る、貼り重ねる。紙紐を巻きつける。紙パルプによるテクスチャの表現。私はこれらの手法に漆を組み合わせ魅力的な作品を作ることにした。

モチーフとしたのはアメリカバイソン。バイソンの持つ雄々しさ、また柔らかな肉体に秘められた鋭さを紙を折ることで表現し、対して脚部は曲線を追うことで生き物のしなやかさを表現した。



ゆうこう こ
幽香壺

漆・麻布・乾漆・変わり塗り

φ40×h80mm

φ40×h70mm

φ45×h70mm

φ45×h75mm

w50×d25×h75mm

w45×d25×h70mm

w40×d25×h80mm

w45×d25×h70mm

中谷 亜季

Nakatani, Aki

デザイン工芸コース

現在の日本の香りの形態は大きく分類して三つある。一つ目は香水や薫物といった「身に纏う香り」、二つ目はお香やアロマテラピーなど「空間を彩る香り」、三つ目は組香やワインテイスティングなどの「評価される香り」である。

一方、タイではチャルン・チットというメンソール系の香料を配合した嗅ぎ葉がよく販売されていたり、中国では好きな香りの嗅ぎ煙草を鼻煙壺という美しい容器に入れ携帯する文化などがある。これらの香りは「個人が嗅ぐための香り」であり日本では一般的に浸透していない。

そこで、この「幽香壺」は持つ人が好きなタイミングで嗅ぐことができる香りの形態を、日本人を対象に提案するため、漆を用い、形は鼻煙壺の伝統的な様式を基に制作した。

また、加飾には「かおり」の原義である“赤く色が浮き出る様子”と、「におい」の原義である“煙や霧などが立ち込める様子”から発想される変わり塗り技法を用いた。



漁神ノ衣

一魚の革と漆を使った素材の研究一

鮭革・漆・金箔・皮革タンニン鞣し・変わり塗り
h650×w600×d230mm

野口 朋寿

Noguchi, Tomohisa

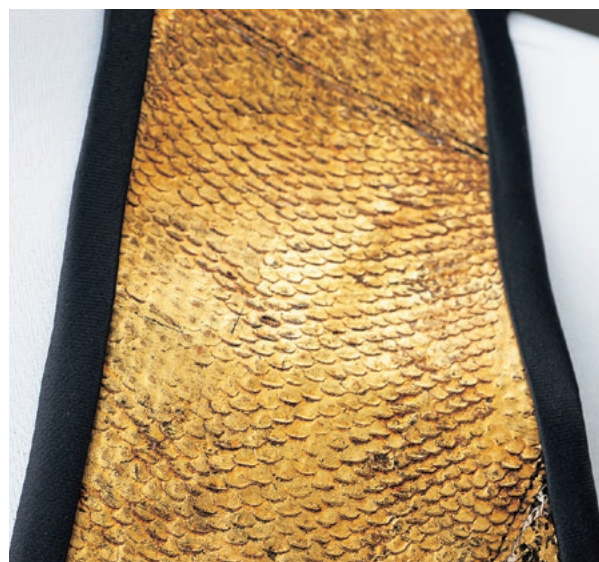
デザイン工芸コース

革素材には、食肉の副産物である牛や豚などの哺乳類や、ワニ、トカゲ、ヘビなどの爬虫類、鳥類、魚類など様々な種類の動物の皮が使われている。

日本では魚をよく食べるが、革素材として利用せず捨てられる皮がたくさんあり、それを活用しようと考えた。皮のコラーゲン繊維になめし剤を結合させることで、そのままでは腐敗してしまう「皮」から、素材として加工できる丈夫でしなやかな「革」になる。なめし加工した鮭の革は他の革素材と比べても強度が劣ったりすることなく丈夫である。

今回は表面の質感を活かすため、鮭の革に漆と金箔を使い表面加飾をし、曲面が少なく、表面積のある、ベストを制作した。漆は古くから革素材と共に使われ、漆皮や印伝など伝統的な技法がある。漆は乾くと硬くなってしまいが薄く塗ることで革の柔らかさを保つことができる。

魚の鱗模様と漆の変わり塗りによる、独特の美しさを感じてもらいたい。



縁

乾漆・箔絵・漆・麻布・金箔
h1400×w1400×d1400mm

畦地 拓海

Azechi, Takumi
芸術文化学研究科

人は決して一人では生きておらず、常に誰かに支えられ、または見守られて日々を過ごしている。時に誰かを想い、想われる中で様々に変容する、人の気持ちや感情のかたちを「縁」というテーマを通して立体造形作品として表現した。

漆芸の乾漆技法を用いて制作した造形にタイで学んだ箔絵技法を取り入れ、表面加飾の中にも空間性を感じられるような文様装飾を施した。



縞合

ーしまあいー

漆・麻布・変わり塗り
h300×w320×d110mm

島田 真佑

Shimada, Mayu

デザイン工芸コース

これまでの制作を通して漆の「変わり塗り」という技法に興味を持った。変わり塗りとは漆の性質を生かした塗りの加飾法であり、表面の色・模様が様々で、蒔絵・螺鈿とは違う独特の肌合いを持つ。また、いろいろな素材を用いて蒔いたり、しかけをしたり、塗った面を研ぎ出すことによって自由に模様を表現することができる。これらの特徴を生かした造形物を制作し、より広く漆工芸を知ってもらおうと考えた。

モチーフとして選んだシマウマは、天敵から身を守るために群れて行動することによって縞模様が混ざって輪郭が見えにくくなる。たくさんの縞が重なり合うことによって生まれる模様が変わり塗りの表現に近いと感じ、2つを組み合わせる新たな表現ができるように制作した。



菓子器十二ヶ月

—日本のならわし、四季景色—

漆・麻布・柄・シナ合板・金粉・銀粉・薄貝
乾漆・挽物・蒔絵・螺鈿

尾形 徳理

Ogata, Eri

デザイン工芸コース

日本には四季があり、それぞれの季節に応じた文化が存在する。それらは季節を感じる心、人や自然のために願った風習であり、日本人が大切にすべき感性、守っていくべき文化であると思う。

私は日本の伝統文化が色濃く表現された和菓子に着目し、菓子器の制作を行った。和菓子は年中行事において、とても重要な役割を果たしており、形や色から四季を感じることができる。和菓子一つ一つに歴史や文化、由来があり、私たちが普段知りえない意味が多く込められている。

十二ヶ月それぞれの月ごとに一つ和菓子を選定し、その和菓子の文化や意味を要素として器をデザインし、制作した。この器を使ってもらい、和菓子に興味を持ち、和菓子を知ることによって日本の伝統文化を再認識してもらいたい。



きらめき

漆・貝・金粉・革製ハイヒール
h185×w140×d240mm

野路 朋生

Noro, Tomomi

デザイン工芸コース

漆工芸は、日本の伝統文化でありながらも、知らない人々が多い。漆を知ってもらいたいという思いから研究テーマにした。

自身が漆を学んだ中で1番魅力を感じた青貝細工を、身近なものであるハイヒールに加飾することで、より魅力が引き出せるのではと考えた。

ハイヒールのもつ美しい曲面と革の黒に、青貝の輝きを加えることで生まれる美しさから、漆工芸について興味をもつきっかけになればと思う。



dear

漆・和紙・金粉・銀粉・樹脂粘土
h30×w130×d80mm
h20×w55×d50mm
h20×w30×d30mm

杉本 真唯

Sugimoto, Mai

デザイン工芸コース

若い世代の人たちにもっと漆を知ってもらい、漆を身近に感じられるものを作りたいと考え、野の花をモチーフにしたブローチを制作しました。

現代の生活の中で漆に触れる機会はとても減っていると感じます。美しい色味や艶、多くの魅力を持つ漆を若い人にも知ってもらいたいと考えました。日常的に使うアクセサリーは、若い人たちに身近な存在であると思い、興味を持ってもらえるのではないかと考えました。

モチーフは野の花を選びました。幼いころにシロツメクサの冠や指輪を作って遊んだ思い出がある人も多いのではないかと思います。身近なモチーフにすることで、懐かしさや親近感のあるものを目指しました。思い出にある野の花のアクセサリーを大人でも楽しめるように、気軽に使える漆のブローチにしました。



漆塗三面万年カレンダー

漆・シナ合板・磁石・ブリキ板
中厚貝・錫金貝など
h400×w1050×d18mm

各務 春菜

Kakamu, Haruna

デザイン工芸コース

身の周りには、使い捨てのモノや手軽な値段で買い替えられるモノが多くなって
いる。それらが普及していくことで、モノを大切に使うことや使い続ける意識が次第
に薄れていくのではないかと感じた。そこで、私は永く使い続けられるモノが大切で
あると考え、万年カレンダーの制作を決めた。

永年使用してもらうために、化学薬品にも強く、耐久性もある漆を用いた。また、漆
は年を重ねるごとに馴染み、味わいが増し、色漆は鮮やかさを増す。手入れをし、永年
大切に使うことによって、更により作品となる。

そして、曜日や日を示すだけでなく、締め切りや記念日など特別な日を示せるよ
うにし、日にちをはずしていくとにより、その日にむけてのカウントダウンをでき
るようにした。置かれるだけではなく、毎日触れ、愛着をもってもらえるような万年
カレンダーを目指し、制作をした。



火山灰と漆のあかり

漆・火山灰・和紙・シナ合板・アクリル板
LED照明器具
φ900×d120mm

石橋 茜

Ishibashi, Akane

デザイン工芸コース

鹿児島では日常的に降灰が起きており、灰が降っていても晴れていても洗濯物を外に干せないなど、生活に多大な影響を与えます。そんな厄介な火山灰ですが、何か利用することはできないかと、様々な商品が生み出されています。そこで、私が学んだ漆工芸と組み合わせて、新たな表現をすることはできないかと考えました。

透漆を塗った和紙は、光に透かすと綺麗な赤色になります。その和紙の上に、蒔絵のように火山灰を蒔き付け、模様を描きました。模様は、伝統工芸の薩摩切子から切子模様をもとにデザインしたものです。そして、土台部分の下地と表面にも火山灰を使っています。光源には、蛍光灯と比べ、漆の劣化を促進させてしまう紫外線を出さず、発熱しにくいLEDの照明を用いました。

見る人に、漆の多様性とあたたかさ、火山灰の素材としての面白さを感じてもらえたら嬉しいです。



Nest of box

—三重奏—

漆・檜

h210×w210×d210mm

h140×w140×d140mm

h70×w280×d140mm

武山 奏

Takeyama, Kanade

デザイン工芸コース



漆の丹後ばらずし道具

木・漆・金粉・顔料

まつぶた(大) : h150×w420×d420mm

まつぶた(小) : h150×w270×d270mm

へら : h215×w70×d6mm

皿 : φ200×h20mm

藤原 里帆

Fujiwara, Riho

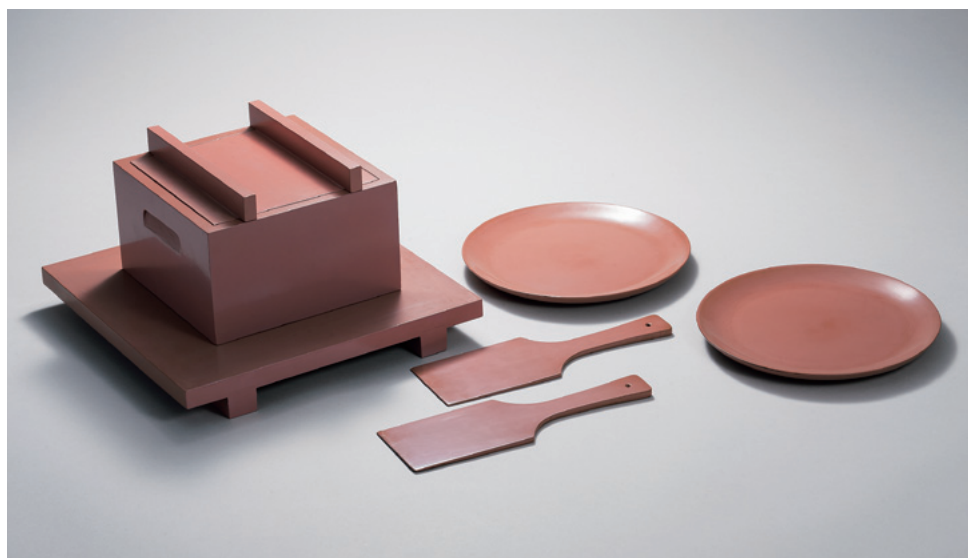
デザイン工芸コース

ばらずしとは、京都府北部、丹後地方の郷土料理である。

まつぶたと呼ばれる浅い木箱で作り、具材にサバの朧が入っているのが特徴だ。家庭によって味付けや具材も様々であり、ハレの日の料理として振舞われてきた。

しかし、既存のまつぶた自体が大きい事、また手間がかかる事から、近年家庭であまり作られなくなっている。郷土料理は、地産地消や食育、地域でのコミュニケーションツールとしての役割を担っており、この料理を残したいと考えた。

ここで提案するばらずし道具は、まつぶたの大きさを2種類に設定した。1つは大勢が集う祭の場、非日常。全体に加飾を施し、豪華絢爛な装いにした。もう1つは家庭での食卓の場、日常用。加飾は抑え、食卓に置いても違和感のない普段使いを目指した。この2種類がある事で、ばらずしを作る場面が増える。また、出来上がり後、外枠を抜く型を取り入れ、更に高さを高くする事で酢飯の間に具材を挟んだり、米の種類を変えたりとばらずしの断面に出来る層が楽しめるようにした。



降り積もり、在る

漆・木粉・アルミ粉
h1300×w1500×d600mm

畦地 拓海

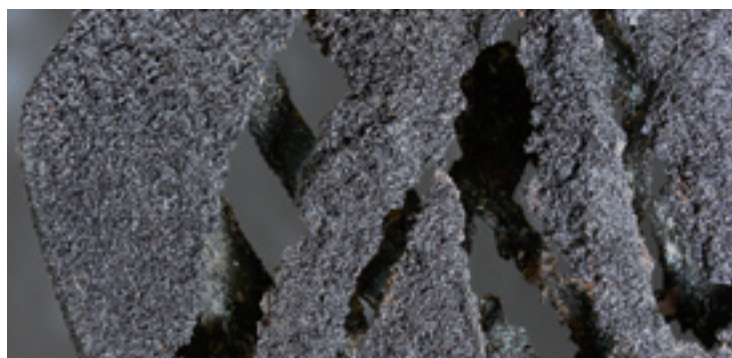
Azechi Takumi

デザイン工芸コース

北陸の土地に来て、降り積もる雪の形が気になり始めた。

自然が創り出す造形の存在感、表情、脆さや儚さから生まれる美しさに惹かれ、

そのイメージを漆の持つ強さ・弱さと重ね合わせた造形作品を制作した。



漆の絵皿

漆・柄・貝・卵殻・漆絵
φ380×h45mm

荒瀬 春佳

Arase Haruka

デザイン工芸コース

漆で絵を描きたい・食器を作りたい、という思いから絵皿を制作した。壁に掛けて鑑賞するだけでなく、実際に使う事ができる。

漆にしか出せない落ち着いた色彩や質感を自分の絵画表現に使いたいと考えた。

図案のテーマは、①人類誕生②高岡のような風景。皿はどの向きからもみられるものなので、天地にこだわらない構成を意識した。



襲(kasane)

—変わり塗りをを用いた
異素材を組み合わせた表現の制作—

h450×w300×d40mm

漆・アクリル板・アルミニウム・真鍮・金など

渡邊 進

Watanabe Shin

デザイン工芸コース

なぜ漆を使うのか？漆を使うことの意味や可能性について考え、制作を行った。

金・銀や貝を用いた豪華で美しい表現のイメージが強い漆という素材は、古くから「いいもの」として価値が認められている。しかし現代では生活の中で漆の製品を使うことが減り、認知度も下がってきている。漆を後世に伝えるためには、漆の魅力や可能性についてもう一度考え直し、現代でも魅力的に感じる表現を模索しなければならないと感じた。

今回は「他の素材をまねる」という変わり塗りの技法に着目した。本来の素材では物理的に不可能な表現も、素材を精巧に真似る漆の技法を用いることで可能となる。

そのような幅広い表現ができる可能性を感じてもらうため、様々な異素材を組み合わせたような、漆には見えないが、漆でしか作れない作品を制作した。

多くの人に漆という素材の可能性を知ってもらいたい。漆をあまり知らない人だけでなく、漆を扱う人にもこの素材の持つ可能性を考えなおしてほしいと考え、制作した。



漆のPARURE

漆・麻布・銀・乾漆・青貝・平文
 φ20×h14mm
 h90×w70mm
 h55×w25mm

森長 柚香

Morinaga Yuka

デザイン工芸コース

同じ素材や、共通するデザインの一組のセットのジュエリーのことをフランス語でPARURE (パリュール) と言います。一揃いであることにより生まれる調和や重厚感、特別な雰囲気と、漆の持つ上品さや優雅さを組み合わせることで、宝石や貴金属を用いた物とはまた違った良さや価値が生まれるのではないかと考え、制作しました。

今回主に用いた加飾は青貝と平文という技法です。貝の持つカラフルな色彩や、角度によって変わって見える輝きには、宝石とはひと味違う魅力があります。また平文は薄い金属の板を貼付ける技法で、細い線表現を用いることで、繊細な雰囲気を表そうと試みました。



ともにいる

一飾れて持ち歩けるピルケース

漆・アルミ・銀粉・貝
ピルケース：φ22×h42mm
スタンド：h20×w64×d37mm
プレート：h5×w130×d130mm

服部 珠美

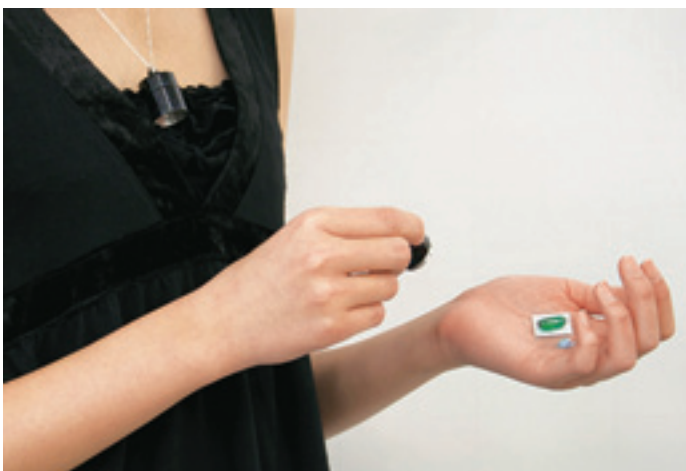
Hattori Tamami

デザイン工芸コース

薬を飲む行為は、自身の治癒力を高める動作でもあるし、現状維持の動作でもある。日本人は我慢の文化があるせいか、薬を飲むことにマイナスイメージを抱いてしまいがちだ。女性が化粧をして自分を生まれ変わらせるのと同じように、薬にも化粧をして気分を変えられたら・・・そういった考えから生まれた提案である。

漆のもつ艶・高級感・きらびやかさを取り入れることで、落ち着いた中にも華やかな印象を与えるねらいがある。

提案を具体化するにあたり、楽しむ心を重要視した。ピルケースの飾り方を遊ぶ楽しみ、選ぶ楽しみの、2つである。ピルケースを飾るためのスタンドは、好みや気分に合わせて並べ方を変える事ができる。フタには月の満ち欠けを描き、実際の月の周期に合わせて飾ったり取り出したりしてもいいし、ランダムにしてもいい。持ち歩くためのフタも2種類あり、下部との組み合わせ方を考えられる。



集いの器

漆・麻布・和紙・錫粉・乾漆
 h55×w920×d550mm
 h85×w920×d550mm

松本 有貴
 Matsumoto Yuki
 デザイン工芸コース

食の豊かさとはなんだろうか。私たちを取り巻く食はライフスタイルの変化に伴い、多様化している。何を、いつ、どの位、何のために、誰と(あるいは一人で)食べるかはある程度自由に選択できる時代になっている。そんな中ひとくちにこれが食の豊かさだと言うことは難しく、ひとそれぞれに豊かさの定義があるだろう。私は誰かと食事を共にすることで育まれていく関係が食の豊かさに繋がると考え、大勢で使うための器を制作した。一つの皿を囲むことで同じ時間、同じ空間を共有した密なコミュニケーションが可能だと考えたからだ。会話を楽しむ団欒の場として食卓を演出するよう、あたたかみを感じられるような加飾を施した。また使用しない時はしまっておくのではなく壁面装飾として飾っておき、インテリアの一部として存在できるようにした。

誰かと一緒に食事をとることは日常ではなくなってきている。誰かと共に食べるという特別な時間を、ただ食べるだけでない楽しい食のひとときとして過ごしてほしい。



ゆめのさけめ

漆・麻布・ストラップコード・銀・螺鈿・乾漆
 φ20mm, φ80mm, φ200mm
 φ20×h40mm, h70×w20mm, φ150mm
 φ20mm, h50×w35×d35mm, h1350×w30mm

長谷川 遥

Hasegawa Haruka

デザイン工芸コース

漆工品が日用品として扱われない要因のひとつに、漆は高価なものだとして、人々が近寄りたがたい印象を抱いていることが挙げられる。だが、この高級感こそ多くの人々が感じている漆の魅力でもある。

では、漆=高級という価値観はそのままに、より身近に感じられるものはないだろうか。そこで私はジュエリーに着目した。ジュエリーとは元来、価値そのものを身に着け提示するためのものである。量産された商品に溢れ安価でものが揃う現代では、漆の高価さが日用品としての良さに結びつくのは難しい。しかし、価値を身に着けることを目的としたジュエリーならば違和感なく手に取れるのではないかと考えた。

現在市販されている漆のジュエリーは、シンプルな形状の胎に蒔絵などの技法を施した大振りなものが多く思う。この度の制作では、布を丸めたときの曲線をそのまま活かしたり、線材を用いることで、華奢で軽やかな漆のジュエリーを目指した。これまで漆工品と関わりのなかった層にも、漆のものと触れるきっかけにしてほしい。



漆を使用した ダンスの衣装

一見られる漆・魅せる漆一

漆・麻布・銀・ビーズ・羽毛・ストーン

胸当 300×450×300mm

腰巻 400×350×250mm

ネックレス 320×150×25mm

髪飾り 300×200×50mm

手甲 600×80×80mm

ネイルチップ 約25×10×7mm

ピアス 200×60×20mm

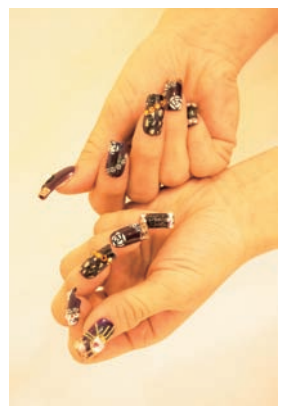
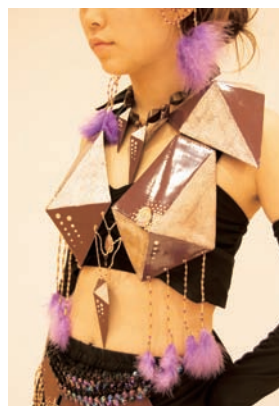
渡部 優

Watanabe Yu

漆工芸は日本の伝統的な産業の一つであり、昔から権力の象徴として用いられたり、祝いの席等に用いられたりすることが多い。その表現や輝きはとても魅力的であり、私の心を掴んで離さない。しかし、漆工芸は現代における私たちの日常生活の中で、身近であるとは決して言い難く、非日常性を持っていると言える。

私は7年のストリートダンスの経験があり、そのパフォーマンスの中で使用する衣装も、私服にはない派手さ、きらびやかさがあり非日常的と言える。しかし、漆工芸との相違点として、衣装には「人に見てもらおう」という目的があり、人に見てもらおう「機会」もある。

そこで、今回ダンスの衣装に漆を使用することで、私が魅力的に感じている漆が、人の目に触れる機会を増やすことが出来ないかと考えた。布や繊維では表現できないような、重厚さ、高貴さが加った衣装を着て、パフォーマンスすることで、漆の魅力が、よりたくさんの人に感じてもらえると良いと思う。



漆の婚約指輪と箱

漆・麻布・カーボンファイバー・天然石
乾漆・変わり塗り

φ60mm
φ15×t4mm

渡部 優

Watanabe Yu

デザイン工芸コース

人は生まれた瞬間から何かを身につける。身につけるものによって個人を認識する。身につけるものによって気分が変わる。勇気もらえる。想いが伝わる。モノを身につけるといことは私たちにとって当たり前になるくらいとても重要なことなのである。

装身具の歴史は深く、日本最古の漆塗りの装身具である『鳥浜貝塚出土の漆塗りの櫛』は、縄文時代から鮮やかな朱色がはっきりと残っている。婚約指輪に漆を使用することで、未永い2人の愛を象徴するとともに、身体に優しい装身具の制作をした。

また大切な想いが込められた婚約指輪を保管しておく、指輪ケースが指輪に見合ったデザインや品質ではないことに疑問を感じていた。指輪にそれぞれの星座の星座石（天然石）を蒔きつめ、箱を各星座を司る惑星（守護星）に見立て、指輪、指輪ケースともに漆を使用し、新しい婚約指輪の価値を提案する。



うるしのコップ

— 日用品としての漆器の研究 —

漆・顔料・木・漆塗装

φ65×h110mm

φ75×h120mm

新夕 菜梨

Nitta Mari

デザイン工芸コース

漆器は「特別なときに使う」「手入れが大変そう」といった堅いイメージを持たれがちである。しかし、特別な手入れは不要で、普段使っている陶磁器やガラス等の食器と同じように洗剤で洗い、布で拭く。ただこれだけで良い。

コップは食卓以外でも使うため、使用頻度が高く、日常性が強いアイテムなので、毎日使うことが漆に必要な水分を補給し、知らないうちに手入れをしていることになる。

また、熱伝導率の低い漆は「温かいものはあたたかく」「冷たいものはつめたく」保ってくれる。

漆黒という言葉もあるように、「黒」のイメージが強い漆だが、実際は様々な色を表現できる。この作品を通して、漆へのイメージが変わり、普段から触れるきっかけになってほしい。



根付小箆筒

—変わり塗りの研究—

漆・MDF・アルミ板・変わり塗り
w350×d355×h380mm

上出 恭子

Kamide Kyoko

デザイン工芸コース

変わり塗りとは、漆の持つ様々な性質や、素材・色を利用した塗りの総称である。各種変わり塗りを工程に沿って試すと共に、色彩やしなげ等の変化による表現の多様性について研究した。また、それにより漆への理解を深めることも目的の一つとした。

変わり塗りの特長としては、表現の多様さが挙げられる。そこで、変わり塗りの活かし方として、根付小箆筒の装飾として見せることにした。変わり塗りを施した板は取り外しできるようになっており、自分の好きな組み合わせをいつでも楽しむことが出来る。この板は中の引き出しのしきりとしても利用でき、また、必要ない板は上部の引き出しにまとめて収納できる。

根付小箆筒の構造は、土産用のご当地根付の収集家たちが「どのように収納したいと思っているのか」という点を参考にした。その結果、「飾って見せる」部分と、「収納する」部分の両面をうまく組み合わせた構造が最もそれに適うと考え、この作品に至った。



コーヒーと家族のひととき

—現代の生活空間における
漆工品の役割とその価値の研究—

漆・麻布・シナ合板・和紙・乾漆・変わり塗リ
w380×d124×h410mm
φ95×h70mm
φ150×h23mm
w75×d40×h65mm
w80×d60×h82mm
w24×d130×h8mm
w32×d105×h22mm

伊藤 智子

Ito Tomoko

デザイン工芸コース

漆工品の魅力は何か。漆は漆の木から採れる樹液で、自然の中から生まれ、人の手によって作られ、最後は人の力を超えた漆の持つ力によって仕上がる。人の手と漆の自然の力が融合して生まれたものであること。ここに、価値、魅力があると思う。しかし、その過程を知らない人にはその価値は伝わりにくい。使うことで口当たりや、さわり心地などを感じてその良さを知り、その奥にある本当の価値に気付いてもらいたい。

インテリアスタイルには、民芸風や和風モダンといった和風スタイルがある。インテリアに漆工芸を取り込むとその歴史や風情により渋いものと認識されがちだ。しかし、和洋折衷の中でも漆の締まった色がアクセントとなり、一つのインテリアスタイルとなると思う。

コーヒー器具はインテリアの一部として楽しまれており、おしゃれなものが多い。そこで、一つのインテリアとして棚付きのコーヒーセットを制作した。このコーヒーセットは、高級感というよりも渋さとカジュアルさを出し、落ち着いた扱いやすいイメージにした。

